

バングラデシュへ出発したのは今年の4月。7ヶ月半の支援活動を終え、12月2日帰国しました。出発前は不安、緊張もありましたが、終わってみると早いもので、ほんとにあっという間の7ヶ月半でしたが、泣いたり笑ったりと毎日が発見、挑戦の日々でした。この場をお借りして、そんな活動・生活を皆様と共有できればと思います。

### 事業の背景

バングラデシュの面積は日本の半分以下、人口約1.5億人、人口密度世界一の国です。世界最貧国と言われる上に、国土の大部分が低地であることから一旦雨が降ると川が増水し氾濫するなど、災害に最も弱い国であるといわれています。(写真1)

2007年11月15日夜間、スーパーサイクロン『シドウル』がバングラデシュの南部沿岸地域を襲い、死者約3300名、被災者890万人という大きな損害をもたらしました。私は国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)の「シドウル復興支援」における保健医療要員として2009年4月から現地に派遣されました。(写真2)

「シドウル復興支援」は倒壊した住宅の立て直しや修理、井戸の整備などによるきれいな水の確保など合計5つの分野、60名以上のスタッフから成り立っています。私が担当していた保健医療分野もその一つで、お互いに協力し合って活動していました。

### 保健医療分野の活動

保健医療分野の目標は「緊急時に被災地の住民が自分たちで対応できる能力を身につける」こと。私たちの主な活動は「緊急時における公衆衛生」のトレーニングでした。対象はサイクロンの被災地に住む住民。4日間のトレーニングで、災害の定義や身の回りの衛生環境改善、下痢や呼吸器感染症に関する講義、基本的な外傷の手当てを始めとするファーストエイドなどを学びます。そして、トレーニングを受けた住民はヘルスボランティアとしてその知識を現地住民に普及していく役割があります。しかし、昔からの風習が根強く残るバングラデシュにおいて、トレーニングで新たな知識を普及するのは簡単なことではありません。例えば溺水患者に対しては「とりあえず水を吐き出させるのが先決。頭の上に持ち上げてぐるぐる回転させる」という、現代の医療では考えられないような奇妙な方法が一般的な対処法として実際に行われています。私もバングラデシュ滞在中溺水患者に遭遇し、CPRを行いました。蘇生中も「持ち上げて水を出しなさい！」と年配の方に何度も指摘されました。(写真3)

トレーニングを受けた住民は「正しい知識が習得できて嬉しい。周りの人たちに自信を持って説明できる」と話し、実際村を訪れた際に、彼らが行う普及活動に参加することができました。また、他のヘルスボランティアは大型バスの大事故に遭遇し、ほかのボランティア4名と連携しながら20名以上の被害者を救出。「頭から大量に出血したり、骨が折れている人がいた。トレーニングで学んだことを思い出し、協力して病院に運び、全員助けることができた」と興奮気味に話していました。合計12回、263名がトレーニングを受け、現在もヘルスボランティアとしてこういった普及活動等を行い、事業終了後は現地スタッフがフォローを行っていく予定です。(写真4)

私自身は事業計画の見直しや活動に必要な予算の算定や管理、トレーニングのスケジュールを立てたり機材の調達など活動全体のマネージメントが主な業務内容でした。何か問題が起きた際の責任は自分にあり、初めはプレッシャーも強かったのですが、他のスタッフの支えのもと、なんとか事業を終了することができました。4日間のトレーニング中、「Japan セッション」と称し、日本の災害や日赤の活動について紹介するのも私の役割でした。

### 現地スタッフとの協力

この活動を一番近くで支えてくれていたのがモホシン先生というバングラ人医師です。経験豊富な髭モジャの

一見こわそうな先生ですが、冗談が大好きで、一番の理解者でした。彼はお別れ会のスピーチで「サチコの病院経験での知識と自分の公衆衛生における知識のバランスは非常に良かった。お互い協力し、ここまでこれた」と話しました。今後のフォローは彼が行う予定で、全ての資料、情報を託し、涙のお別れをしました。帰国後も、現地の状況についていろいろと連絡を取り合っています。(写真5)

7ヶ月半の活動を通して

初めての長期派遣、腰の重いバングラデシュ赤新月社のスタッフ、突然のトレーニングキャンセル、スタッフの離脱、派遣直後の(オフィスに対する)脅迫文書など、辛いこと、怖いこと、悔しいこともたくさんありました。そんなとき元気付けてくれたのは、トレーニング参加者の「参加してよかった。」という一言と笑顔です。どんなに落ち込んででもトレーニングに足を運ぶと元気いっぱいになり、この人たちにできることを精一杯しようと、また前を向いて進むことができました。他の分野のスタッフとの関係も非常に良く、お互いに励まし合い、助け合って過ごした7ヶ月半でした。

カレー味の野菜、カレー味の鳥肉、カレー味のスープ…全てがカレー味から始まる、つまり文化の全く違う中で過ごした7ヶ月半、その違いに戸惑うことも何度もありましたが、ほんとにたくさんの方に支えられ、事業を終了することができました。この活動がバングラデシュの方々の力になることを心から願っています。

また、今年4月から活動を見守ってくださった皆さんに心から感謝し、今回の経験を還元すると共に、今後の活動に生かしていきたいと考えています。ありがとうございました。



写真1



写真2 サイクロン直後の被災地



写真3 トレーニング風景。溺水患者の呼吸状態を確認



写真4 トレーニングを受けたボランティアによる普及活動



写真5 左にいるのがモホシン先生。ワークショップでは事業終了後のフォローアップについて関係者全員で話し合いました。



サイクロン被災地の村を訪問中。